

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

## 主 論 文 の 要 旨

論文題目	Wonder and Wandering in <i>The Faerie Qveene</i> (『妖精の女王』におけるワンダーと彷徨い)
氏 名	陳 璐

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論はエドモンド・スペンサー (Edmund Spenser) の叙事詩『妖精の女王 (*The Faerie Qveene*)』(1590、1596年出版)におけるワンダーの表象に焦点を合わせ、英国近代初期の歴史的コンテクストを中心に、主人公たちの脱逸、彷徨いといった行為について分析し、スペンサー的なワンダー像を解明することが目的である。

本作品中において、ワンダーの現象が度々起こる。特に注目すべきケースとして、第一巻の主人公赤十字の騎士 (Red Cross Knight)、第二巻の主人公であるサー・ガイアン (Sir Guyon) 及び第六巻の主人公サー・キャリドア (Sir Calidore) が挙げられる。赤十字の騎士は邪な魔術の罠により、ふしだらな夢と幻を経験するが、彼はその偽のヴィジョンに対し大いに驚き、エクスタシー状態に陥った後、保護すべき貴婦人ユーナ (Una) を捨て、放浪の旅に出る。サー・ガイアンについて、彼はマーモン (Mammon) の財宝と至福の園に目を惹かれるが、一所懸命心の欲望を抑え、マーモンを拒否し、至福の園を破壊する。そして、サー・キャリドアは口喧しい獣 (Blatant Beast) を追跡する途中、突然現れた牧歌の世界に惹かれ、女羊飼いパストレラ的美貌と牧歌生活に魅了される。キャリドアは本来果たすべき責任を捨て、牧歌世界に飛び込むことになる。これらの主人公たちはワンダーを目の前にして反応は様々であるが、共通点として、彼らは本来のミッションから脱逸するような選択肢をすることだと言えるだろう。これらのワンダーの瞬間について疑問が生じる。主人公が魅了される瞬間、何が起きているのだろうか。彼らは何故、度々本来のミッションから脱逸するだろうか。また、こういったワンダーの正体は如何なるものだろうか。ワンダーはこの叙事詩の中においてどのような役割を果たしているのだろうか。本論は本作品中のワンダー現象を解明することにより、スペンサーのワンダーの特徴とそれと英国近代初期の歴史的コンテクストの関連を明らかにしたい。

今までの研究の中に、ワンダーを詩的概念、あるいは哲学的な概念として捉え、ル

ネッサンス時代におけるワンダー像についての研究はあるが、スペンサーの作品中におけるワンダーの全体像については不明のままである。本論はワンダーを詩的概念や哲学的な概念としてではなく、デバイスと具体的な対象として捉え、当時の英国社会との関連を、一次資料を通して明らかにしながら、ワンダーが本作品中における機能、特徴及び価値について明らかにする。

本論は三章から成る。

第一章はワンダーといった感情に巡って、第一巻赤十字の騎士の冒険について分析する。

第二章はワンダーを具体的な対象として見なし、新世界のワンダーと第二巻サー・ガイアのそれに対する反応について論じる。

第三章は牧歌世界といったワンダーを、スペンサー自身のアイルランドにおける経験と連携し、第六巻の牧歌世界に関する物語を中心に、本叙事詩における牧歌世界の位置付けを明らかにする。